

移住者ではなく 地域住民として暮らす



東京から最上町に移り住んで4年になります。私の息子は重度の障害があり、最上町にある知的障害者更生施設「最上ふれあい学園」に平成二年の開園から入園しています。この施設は東京都の施設です。私は東京で仕事がありましたので、息子だけを施設に預ける形になりました。月に一度ほど家族と最上町を訪れ、レンタカーやタクシーを使い、外泊して息子と過ごしました。温泉宿では宿の方に気を遣っていただいたものの、息子が壁や戸を蹴るなど暴れてしまい、他のお客さんに迷惑をかけることが申し訳なかったため、その後はペンションを利用するようになりました。

そのような東京と山形を行き来する生活を13年間続けている中で妻とも相談し、「定年退職したら息子のいる最上町に移住しよう」と考えるようになっていました。

まず、移住するにあたり家を探しました。いくつかの建売物件を見たものの条件が合わずにいたところ、運良く町の再開発で売り出されていた分譲地を見つけて購入することができました。何年かの準備期間を経て、家を建てて移住をすることになりました。資金は以前から少しずつ貯めていましたし、退職金と年金で暮らせるようにと考えていました。また、車も購入しました。

何度もこの地を訪れていましたので雪の多さは知っていたのですが、自宅の雪かきを自分ですることは体力の衰えもあり予想以上に大変でした。雪道の運転にも慣れていませんでしたので、車をぶつけてしまったこともあります。また、車を運転しない妻にとっては冬場の買い物などは大変なようです。

渡辺 禮さん

東京都出身 昭和14年生まれ

2002年 最上町へ移住

積極的に地域との交流を

行っている

分譲地は新しく入られた人の集まりでしたので、古くからのしきたりや風習などはなく近所付き合いはまったく問題ありませんでした。妻は庭で家庭菜園をしています。親切な近所の人たちがアドバイスしてくれたり、近所の方が作った野菜やお漬物を頂いたりして、菜園を通じた交流があります。

私自身も町の人々との交流を深めるために、地域の行事には積極的に参加しています。

NPOの活動に参加して、訪問介護を手伝ったり、引きこもりを防ぐために公民館でお年寄りといういろいろな交流を行ったりしています。最近では、両親が共働きで夕方は家に一人になってしまう子供たちのために学童クラブの活動にも参加しています。また、町の清掃も行っていて、これで地域の人に顔を覚えてもらうきっかけになりました。

私の移住のきっかけは、自然が豊かだとか、例えば釣りのような趣味が楽しめるというものではなく、「息子がお世話になっている地域の活性化に少しでも役立ちたい」という思いがあったことです。地域のみながいつでもあいさつできる環境を作ることが、さらに安全で暮らしやすい町をつくるための第一歩であると思っています。

[インタビュー後記]

渡辺さんは、深い縁で結ばれたこの第二の故郷の地域を活性化することが目標だと語ってくださいました。地域の実情について、移住者であるからこそ気づくこともあると知りました。一方で渡辺さん自身は、移住者としてではなく、地域住民として自分の住む地域をより良くしていこうと活動していっているのだと強く感じました。